

## 緊張

### 九十年の御一生

親鸞聖人の御一生、九十年の間は何処をたづねても反古がない。

聖人は高倉天皇の承安三年四月一日、京都の郊外、日野の里に、藤原氏、皇太后宮大進有範卿を父とし、吉光女を母として誕生せられた。

四歳の時に父に、八歳の時には母に死に別れた不幸の子が、他日、法蔵菩薩の来現、阿弥陀如来の化身として、七百年の今日、いよいよ精神界の光たる、聖人の幼時である。幼名松若君、松は緑、千古の若い松の緑。(一)

九歳の時、慈鎮和尚のもとで出家得道なさる。範宴少納言公と号す。(二)

聖追自力によって仏の悟に入ろうとした聖人の精進努力は、まふまと裏切られて、血のにじむような煩悶を抱いて、形式仏教、死骸仏教、因襲仏教を棄てて、吉水教団の法然上人の所へ入門せられたのが二十九歳の時。(三)

聖人三十五歳の時である。書水教団が破壊されて、越後の国へ流罪の身となる。

北越から関東に赴かれた聖人は、常陸国稲田の草庵で、弟子を教化し、数行信証を著述せられ、六十歳、再び京都にかえられた。(四)

そうして一生不遇の内に、九十歳、大往生をとげて安養浄土に還帰遊ばした。(五) その御一生の何処にも反古がない。死んだところがない。みんな生きてをる。

「何故なのだろう?」

「失礼ですがあなたは何歳におなりですか。」

「三十歳になります。」

この方の生活の中心は何なのだろうか。しつかと生きることの根底は握られているだろうか。

生活の本尊は何なのだろうか。

色々な話がはずむ。不知不識の間に輝きのない、灰色な愚痴が、化粧くずれのしたお薪にあらわれ、お口から言葉となつて出る。

「もう駄目でございます。子供は三人もあるし、何で生きているのか訳が知れませぬ。まあ子供にひかされて生きています。読書も出来ず、修養も出来ず、女学校卒業当時の理想など全く空想でございました。毎日つまらぬ仕事にひかされて……」

ひかされて、子供と仕事に、つまらぬ仕事? その仕事と子供にひかされて。

考えただけでも嫌になる。灰色な生き方、輝きのない一生、嫌怠の二字がその奥様の一生を支配する。

この奥様御一人ではない。世間の大部分の人が大概、目の世界と、鼻の世界と、舌の世界と、耳の世界と、皮膚の世界と、それ等を統一する迷妄の我に囚われた世界。それだけで死んでゆく。

「何故生活に輝きがないのだろう。」

「何故何処をとつても反古だらけなのだろうか。」

机上の手紙の束に手をかけて、一番上のを開いてもう一度拝読する。

「先日も昼夜御親切なる御言葉に預り、この上もなく嬉しう存じます。先生とお別れ致しましてより、途中何の変わりもなく、いそいそと故郷さして帰りました。帰つてみれば母は待ちこがれたような顔して私を迎えて下さいました。私はあのニコニコした母の顔を見るなり、思わず合掌いたしました。「ああ、今は農繁期で、一人なりとも人手のいる忙しい中を、よくも参らして下さいました。有難うございます」と申しますと、母はよく参つてくれたと喜んでくれました。その時の心中の楽しかった事、先生お察し下さいませ。」

麦が熟れる。田の苗がのびる。田植の仕度が忙しい。こんな嬉しい生活を持つ法姉が、生きた魂に立ち上つて、生きた仕事に力を入れられる。万緑叢中紅一点、灰色な生存者の内に念仏の子の生活だけが輝く、そしてその生活がそのまま安養浄土を莊嚴する。

「先生、私はある団員の方と次の様な問答を致しました。黙していようかとも存じましたがちよつと答えました。試練か、攻撃か存じませんが。」

問 「住岡先生は真実の信仰家でしょうか。」

答 「私には判りません。私は先生の信仰を云々する資格を有しません。」

問 「もしも先生の信仰が間違つていたら、団員悉く又一般民衆を迷わすではありませんか。」

答 「私は先生の事は知りません。一般の方の事も、他の団員の方のことも、全然判りません。」

問 「もし先生のが間違つたものであると仮定した時、今日まで信じていた団員又他の人の信仰は破壊されはしないでしょうか。あなたはどうです。先生と一緒に迷つて行きますか。」

答 「私には他の人の信仰はわかりません。私だけは決して迷いません。私は先生に救済して頂くのではありません。私は私で救います。私の仏に、私の如来に救済して頂くのです。」

自分の足が大地の上についていない者には、自分の忙しい生活があることを知らぬ。自分自身の生きて行く事に目覚めた者には、他人のことを言っている暇がない。

世の中には幽霊のように足のない人間があまりに多い。

頭と手だけがあまりに大きくて、足の小さい歩けない人間があまりに多い。

自分を見る目がなくて、他人のことばかり見ている人。

自分に何も無いことに気づかないで、他人の信仰が云々したくなる者。

こんな人たちの中に、他人の信仰の批判よりも、つまらぬ閑な議論よりも、自分自身の生活を持つ法姉があるかと思えば嬉しくてたまらぬ。

「信樂を願力にあらわし」て生ききつた親鸞様の生活には、批判に暮す閑な時がなかった。善悪の二字よりも本願に生ききつて行く内部生活が、あまりに豊かであった。

「食うために生きますか。生きるために食いますか。」  
誰でもすぐに

「はい生きるために食います。」

と答えられる。では食うために使った時間と努力とは、生きる方便のために使ったのです。真剣に生きるために使った時間、その時間で何をしました。

「さあ？ それは……」

「さあ？ それはどうです。」

「子供を五人生んで育てました。」

それは立派なことです。けれどもそれだけにあなたの過去は使われましたか。雀でも猫でも、食って子供を育てます。

「私は生きています。何のために生きるか？」

その大問題に答を得ましたか。答を得た方は進んで、それが一片の空想に終わらないであなた自身の生活になりましたか。

「食うことが手段なれば、生きる目的は何ですか。」

「それに答を得た方は、それに更に答を得ましたか。」

問うて見て、ハタと行き詰まったままのお方が大部分ではあるまいか。

今は午後六時、この原稿の途中、今から二時間ほど前に今まで会ったこともない二人の聞法者の来訪を受ける。今までその方々と語っていた。

「何を求めて来ました。」

「生死の問題についてお教を受けに来ました。」

「何故生死の問題が気にかかりますか。」

すると一人の方が

「死を考えますので。」

「まだありますか。」

「地獄におちますから。」

「ではお問いますが、もし地獄がないものなら何としますか。地獄がないものと知れても道を求めますか。」

「地獄がないものなら聞かしてもらう必要はありません。」

何という悲しい聞法者たちであろうか。自分自身が問題ではなくて、自分とかけ離れた地獄が問題なのだ。二時間程お話しして夕食をとる。書棚から書物をひき出すついでに後藤静香氏の「活ける声」が目についた。頁を繰って行くと信仰に關したことが二三ある。

「信仰の価値は男女によつて異なるものでない。女には宗教が必要だという男子は、宗教を以て弱者の声と思つているかも知れぬが、信仰は無用だと言つていろいろ強者こそ、お気毒なる弱者である。もちろん、ここに言う信仰は単に死に際に極楽浄土に詣れるようにとお願ひしたり、自分はなまけているくせに、家内安全を祈つていたりする様な、低級な信仰の意味ではない。朝から晩まで一挙手一投足が、この

信仰を根底としたる人生観から割り出され、人間の算盤より算出したる打算を超越して、自己の一切を率いてゆく大原動力でなくてはならぬ。」

至極共鳴する。宗教は弱者の声ではない。弱き我に死して、金剛の彼に生きるのである。

「もちろん、ここに言う信仰は単に死に際に極楽浄土に詣れるようにとお願ひしたり、自分はなまけているくせに家内安全を祈ったりしている様な、低級な信仰の意味ではない。」

この一節を何と見る。親鸞聖人の信仰は決してそんなことではなかった。

「憶念弥陀仏本願 自然即時入必定」(「弥陀仏の本願を憶念すれば、自然に即時に必定に入る。」) という偉大なる宣言や

「大悲の願船に乗じて光明の広海に浮びぬれば、至徳の風静かにして、衆禍の波転ず。」

との胸中にみなぎる風光は、単なる極楽参りを願う功利心から生れ出たのであろうか。

自己の懺悔に根ざさない、聞きおぼえの地獄をのがれて、極楽に入つて楽しみたい。それは断じて浄土真宗の信仰ではない。

地獄とは、責任に忠実なる者が、身、口、意の三業をながめつつ、真実を求めねばおられぬ如来智にはからはれて、自分の全体に行きづまって泣いた尊い魂の声なのだ。

だから、自分自身を見ない者と、責任を知らぬ者と、真実を求める心のない者にどうしてほんとの魂の声としての地獄があろうぞ。遺悩ながら、真宗信者の大部分がこうではあるまいか。

後藤氏の言葉に眼を移す。

「日本の青年は誰が率いてくれる。日本は形の上では仏教国であるが、然らば今日の寺院に、青年の大多数を引きつけ得る何等かの力があるであろうか。単に極楽浄土ばかりを目標にしている爺さん婆あさんはいざ知らず、血気盛な青年に充分の理解と同情とを以てその指導者たる事を、現在の東西両本願寺にお願いすることが出来るか。」

私は残念ながら、どんなにひいきみに見ても、この問いに対してまちがいと主張するだけの自信がない。

「お寺は年寄が隠居道楽に集る所だ。」との青年の考え違いをどうすれば、何時になつたら消し得るだろう。

「爺よ、婆よ、そのまま来い。」

それが真宗を嘲笑する青年の言葉ではないか。「まんま」ということが、煩惱即菩提とか、生死即涅槃とか、平等即差別とか、色即是空とか、現象即実在とかそんな、高遠な、高級な、釈尊の悟り、宇宙の真理を物語る言葉に使われる「即」の字を、平たく言えば「まんま」ということであることを、どうすれば青年に知らすことが出来るか。

寺院の人たちから、青年男女が寺院に足をかけなくなつたことを歎く言葉を聞くことが多い。僧侶は競争したり、小さい経緯でいがみ合つている暇や、盛なる者を陥れたりするかわりに、どうして青年を救つてくれないのだろう。私は多くの機会に青年に接する。そしてその求道心の燃えていることに、真実に共鳴し易いことに、入信の早いのに、生きた信仰に目覚めやすいのに驚いている。

もし人間が花火線香のような自覚でなくて、人生の深さに根底をおいた自覚に入るならば、単なる道徳的修養では飽き足らなくなる。弥陀仏のお誓いには、第十九願に道徳的目覚めが言つてある。人間には是非必要だから要門という。道徳的目覚めから更に一步自分のより深さを求める者は、生命の根源にさかのぼつて、その本体をつきつめようとする。そこに真門が開かれる。それが二十願だ。更に人間の小さき迷いのほからいから脱して、もつと天地宇宙に絶する大きな生命の内に融合せる自己を見出した者は、至心、信樂不退転の自分を発見して、いよいよ絶対真実の生活に入る選択本願、真実白道の生活がそれである。

後藤先生は「修養団は何れの宗派にも属せず、従つて安心立命をも与えねば、極樂浄土や天国の道案内をするのでもない。……修養の本舞台に入ろうとする人には物足りないかも知れぬ。」と言う。

我等は高級なる意味において極樂浄土を説く。万人の救われて行く易行の大道を自らも信じ、縁にふれて隣人にもお話する。

信仰はそれ自身独立のもので、修養のための方便ではない。けれども修養ということとを、ずっと広い意味にとるならば、信仰は修養の本舞台である。その根強い根底である。私は現代青年がその飽くことなき知識欲、真理に対する深い憧れ、燃ゆる求道心を提げて、我が仏教の門に入つて、いわゆる、修養の本舞台に入つてくれることを、声をあげて獅子吼し絶叫する。

私は自分が可愛い。刻々に生れ出てくる自分を見ていると、たまらなく可愛い。私はこの自分を真に愛して行く。自分を愛して行く者にも日々御浄土への道が開かれる。

我が魂は覚めて行く。愛する我は覚めて行く。無明の暗から覚めゆく魂の奥底から、光明無量の生命のたぎりがほとぼしる。

いのちの河が流れる。

かつては崖があることが恐しかった。

巖にくだかれることが辛かった。

せきてにせかれることが悲しかった。

けれども、けれども、

決決してほとぼしる生命の流れは、

恋つては 美しき哉 恋愛の瀧

くだけはふき出す 苦樂の雪

せかれては突破する 概念の化城  
乗托する本願一実の流れ  
香をたいて、静かに澄む生命の淵  
湯たぎって、柔かに動く詩想の瀬  
予想もゆるさぬ  
退転もならぬ  
永劫の刹那に立ち上って  
生命進達のリズムをきく  
南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏  
かくして我は永遠に若い。  
緊張。緊張。  
はりきった魂の前には何物もない。